

通

經

高麗史
方

新選 名著複刻全集 近代文学館

昭和45年10月1日 印刷

昭和45年10月20日 発行
(第4刷)

抒情詩社版

道 程

高村光太郎著

編 集 新選名著複刻全集近代文学館・編集委員会

代表者 稲垣達郎

刊 行 財団法人 日本近代文学館

東京都目黒区駒場4-3-55

代表者 塩田良平

総発売元 株式会社 図書月販

東京都新宿区市谷本村町35 千代田ビル

代表者 中森 蔭 人

製 作 株式会社 ほるぷ出版

東京都千代田区麹町3-2 相互第1ビル

代表者 荒井正太

印刷進行 東京連合印刷株式会社

東京都千代田区麹町3-2 相互第1ビル

代表者 長尾 義 輝

印刷 株式会社 永井印刷所

製本 有限会社 手塚製本所

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

目次

一九一〇年

矢はれたるモナ・リザ (三)

生けるもの (七)

根付の國 (八)

一九一一年

畫室の夜 (三)

熊の毛皮 (四)

人形町 (二六)

甘栗 (二八)

庭の小鳥(三〇)

亡命者(三一)

鳩(三六)

食後の酒(三八)

寂寥(三〇)

聲(三四)

風(三九)

新緑の毒素(四二)

癡癡者より(五〇)

「河内屋與兵衛」(五九)

髪を洗ふ女(六一)

「心中宵庚申」(三)

夏(六五)

なまけもの(六六)

手(七二)

金秤(七三)

はかなごと(七四)

めくり暦(七六)

地上のモナ・リザ(七七)

葛根湯(八〇)

夜半(八二)

けもの(八五)

あつき日(八七)

父の顔(八九)

泥七寶(九三)

ビフテキの皿(一二)

一九一二年

青い葉が出ても(二六)

赤鬚さん(二八)

あをい雨(三〇)

友の妻(二七)

——に(二七)

夏の夜の食欲(二四)

或る夜のころ (一五〇)

おそれ (二五四)

犬吠の太郎 (二六二)

さびしきみち (二六六)

カフェにて (二七〇)

梟の族 (二七二)

冬が来る (二七五)

カフェにて (二七七)

或る宵 (二七八)

夜 (二八三)

狂者の詩 (二八六)

郊外の人に(一九二)

冬の朝のめざめ(一九五)

カフェにて(一九九)

師走十日(二〇〇)

戦闘(二〇五)

一九一三年

人に(二一四)

カフェにて(二一八)

深夜の雪(二一九)

人類の泉(二二三)

山(二三〇)

よろこびを告ぐ(二四)

現實(二四二)

冬が來た(二四三)

冬の詩(二四五)

牛(二六二)

僕等(二七二)

一九一四年

道程(二八〇)

愛の嘆美(二八二)

群集に(二八六)

婚姻の榮誦(二九三)

萬物と共に踊る (二九九)

瀕死の人に與ふ (三〇五)

晚餐 (三一二)

五月の土壤 (三六)

淫心 (三二〇)

秋の祈 (三四)

▽ 裝 幀 内 藤 銀 策 氏 △

一九一〇年

失はれたるモナ・リザ

モナ・リザは歩み去れり

かの不思議なる微笑に銀の如き顫音を加へて
「よき人になれかし」と

とほくはかなく、かなしげに

また、凱旋の將軍の夫人が偷視ぬすみみの如き

冷かにしてあたたかなる

銀の如き顫音を加へて

玄づやかに、つつましやかに

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

深く被はれたる煤色の假漆こそ

はれやかに解かれたれ

ながく畫堂の壁に閉ぢられたる

額ぶちこそは除かれたれ

敬虔の涙をたたへて

畫布にむかひたる

迷ひふかき裏切者の畫家こそはかなしけれ

ああ、畫家こそははかなけれ

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

心弱く、痛ましけれど

手に權謀の力つよき

畫みれば淡緑に

夜みれば眞紅なる

かのアレキサンドルの青玉せいぎよくの如き

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

我が魂を脅し

我が生の燃焼に油をそそぎし

モナ・リザの唇はなほ微笑せり

ねたましきかな

モナ・リザは涙をながさず

ただ東洋の眞珠の如き

うるみある淡碧うすあをの齒をみせて微笑せり

額ぶちを離れたる

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

かつてその不可思議に心をののき
逃亡を企てし我なれど

ああ、あやしきかな

歩み去るその後うしろかげの慕はしさよ

幻の如く、又阿片を燐やく烟の如く

消えなば、いかに悲しからむ

ああ、紀念すべき霜月の末の日よ

モナ・リザは歩み去れり

(十二月十四日)

わが愛せし某樓の女を我假にモナリザと名けたりき